

Kukuna だより(第5号)



新学期、子どもの「安心」を真ん中に

～先生と保護者でつなぐ 小さな一歩～

長い夏休みが終わり、新学期が始まります。「学校に行けるだろうか」「また休み始めたらいかがでしょうか」——新学期の前に、不安を感じているのは子どもだけではなく、保護者も先生方も、それぞれの立場で「どう関わればいいのか」と考えておられることと思います。夏休みに元気を取り戻したように見えても、それがそのまま「学校へ戻れる」ことではありません。新学期が近づくだけで、不安が強くなったり、眠れなくなったり、腹痛や頭痛、イライラなどが表れる子どももいます。

そんな時期だからこそ、「学校へ行けるか」だけでなく、「安心して次の一歩を選べるか」を先生と保護者と一緒に考えてみませんか。

1. 「行けた」「行けなかった」だけをものさしにしない

新学期は、つい「登校できたか」に目が向きます。

でも、朝起きられた、着替えることができた、家を出られた、学校の近くまで行けた、先生に会えた、別室で少し過ごせた、「今日は無理」と自分から伝えられた。これらも、その子にとっては大切な一歩です。回復は、いつも一直線に進むわけではありません。行ける日もあれば、休む日もあります。「今日は何ができたかな」家庭と学校が同じ視点で小さな変化を見つけることが、子どもの安心につながります。

2. 先生へ：「来られたこと」より「会えたこと」を

久しぶりに登校してきた子どもは、校門をくぐるだけでも大きなエネルギーを使っているかもしれません。「明日も来られそう？」と次の登校を確認する前に、「会えてうれしいよ」「今日はここまで大丈夫だよ」と、その子自身を歓迎するメッセージを届けてみてください。

学校が「頑張らなければいけない場所」ではなく、「行けない日があっても、つながっていただける場所」であることが大切です。



3. 保護者へ：「明日は行ける？」を毎日の確認にしない

心配だからこそ、「明日は学校どうする？」「今日は行けそう？」と聞きたくなります。でも、毎日「行く・行かない」の答えを求められることが、子どもの負担になる場合があります。「今日はどう過ごしたい？」「何だったらできそう？」「困ったら一緒に考えよう」と、子ども自身が選べる余白を残してみましよう。朝になって「やっぱり無理」となったときも、「明日は行ってくたでしよう」ではなく、「朝になったらしんどくなつたんだね」とその時の状態を受けとめることも大切です。

4. 学校と家庭で「違う姿」があってもいい

「学校では楽しそうなのに、家に帰るとぐったりしている」そんなことも珍しくありません。反対に、家庭では元気で、学校では動けなくなることもあります。どちらかが本当の姿ということはありません。先生が知っている姿と、保護者が知っている姿。その両方を持ち寄ることで、見えてくることがあります。「学校では頑張っている。その分家では疲れているのかもしれないね」そんなふうに、学校と家庭が互いの情報を合わせながら、その子の状態を考えていきたいものです。

5. 「行けた次の日」も大切に

久しぶりに登校できると、大人はほっとします。でも一日頑張ったことでエネルギーを使い、翌朝動けなくなることもあります。「昨日は行けたのに」ではなく、「昨日頑張った分、今日は疲れが出たのかもしれないね」と捉えてみてください。行く、休む、また行ってみる。その繰り返しの中で、自分に合ったペースを見つけていく子どももいます。



6. 新学期、「戻す」より「つなぐ」

新学期だからと言って、以前と同じ生活に一気に戻す必要はありません。教室でみんなとつながる。先生とつながる。友だちとつながる。家庭で安心して過ごす。支援してくれる人とつながる。そのどれもが大切な一歩です。先生と保護者が、「どうすれば学校に来られるだろう」だけではなく、「どうすれば、この子が安心して次の一歩を選べるだろう」と一緒に考えること。学校に行けた日も、行けなかった日も、子どもとのつながりを切らないこと。先生も、保護者も、支援者も、子どもを真ん中にした、同じチームです。

施設見学や教育相談を

受付けています。

※前日までに予約してください。

電話 079-661-9019

ククナの8月の予定

8月25日(火)子ども食堂

8月26日(水)スタッフ会議

※26日は14時30分までに迎えをお願いします